

【いつもと違うその人を発見する】

事業所に出勤して来て、玄関に入った途端もうあなたの仕事は始まっています。くいつもこんな時間には玄関にはいないAさんが今日は玄関にいる、あなたの頭は記憶をもとにぐるぐる回転します。“アッそうか、今日は外出日だ”そこで「今日は外出の日だね、担当の〇〇さんとお出かけだ、楽しみだね。待ちどうしくてもう玄関にいるんだ」と声をかける。Aさんがそうなんだよと言ったかのようにニコッと笑う。

タイムカードに打刻するために事務室に向かうと、いつもは後追いなどしないBさんが後ろをついてくる。ニコニコ顔が多い彼女の顔が今日はなぜか緊張に満ちている。またあなたの頭はぐるぐる回転します。“今日は何かあったっけ？”思いつけない頭を振りながらBさんのスケジュールボードへ。そこには歯科検診のカードが入っていた。「そうか歯科検診か、大嫌いだよね、歯医者さん。大丈夫、今日は遅番で私が夜までいるから歯科検診は一緒だよ。必ず一緒にいて応援するから安心してね。お医者さんも嫌いだけどいつもと違うことがあるのも苦手だよね」。Bさんの緊張の表情がゆっくりといつもの柔らかな顔になって離れていく。

職員室で昨日の日誌に目を通しているところ、このところほとんど見せなかった行動だが、Cさんが手を引いて洗濯場へあなたを連れて行こうとする。“最近は無くなっていたのにどうしてなんだろう”また、あなたの頭がぐるぐる回転します。「ちょっと待っててね、今、日誌を見るからね。…そうか、昨日の夜、お父さんから電話があって、今度の日曜日会いに来てくれることになったんだ。久しぶりだね。一緒にチャーハン食べるんだと書いてあるよ、良かったね」。洗濯場へ引っ張っていこうとした手が緩んで、居室へさっさと戻っていったCさんだった。

さて、勤務時間、支援開始だ。フロアへ出てメンバーさん方一人ひとりに挨拶を始めるといつもに比べてかなり重ね着のDさん、どことなく表情が寂しげだ。

“どうしたんだろう？何かうまくいってないことあるのかなあ？”「Dさん、どうしたの？」、他の職員が朝のできごとを報告してくれる。「今朝、食堂でちょっとEさんとやりあっちゃって、大切にしていたクラス旅行で買ったコップが割れちゃったんですよ。かなりショックみたいでそのあと何枚も重ね着をしています」“そうか、そうだったんだ。怒られると思って心配なんだろうな”、そこで「何も心配することないよ。コップなんかまた買えば良いし、ケンカだってDさんだけが悪いんじゃないでしょ。後でEさんとちゃんと話してみよう。旅行の時のコップ、また同じのが欲しいよね。次の次のグループが同じところに行くから買って来てって、頼めば良いよ」。30分ほど後で会ったときには、もうDさんの重ね着は消失していた。

芭蕉の句で『よく見れば なすな花咲く 垣根かな』というものがある。関心を寄せなければ、どんなものでも目に飛び込んで来ないのだと芭蕉は詠んだと私は考えるが、人間関係において、この“関心を寄せる”という行為が、そしてこの行為の結果として“違いに気づく”という事態が生じなければ、支援という関係は作りようがない。同じ現象を見て“あれ？いつもと違うぞ”とを感じる人と“いつもと同じ”とを感じる人とは、支援能力はまるで違うのである。悲しい言い方ではあるが、違いに気づくことができない人は、その時点ですでに支援者失格である。

また、“関心を寄せる”という行為は、何気ないことのように、すでに対象者に対するポジティブなメッセージであることを支援者はもっと自覚すべきです。つまり意図的に関心を寄せるという行為を起動させる必要があるのです。

関心を寄せられているという空気（その反対に疎んじられているという空気）を感じる力は、知的障がいや自閉症の方々はおそらく秀でています。上手にしゃべることができないが故に発達した能力です。